

聖書：Ⅱサムエル 23：1～39

説教題：太陽が昇る朝の光

日時：2019年5月12日（夕拝）

サムエル記も残すところ、あと2章となりました。1節に「これはダビデの最後のことばである」とあり、これが彼の人生晩年の言葉、遺言のような言葉であることが分かります。誰の場合でも「最後のことば」は重要です。聖書の中には他にヤコブやモーセの最後の言葉も記されていますが、いずれもそうです。さて「エッサイの子ダビデの告げたことば。いと高き方によって上げられた者、ヤコブの神に油注がれた者の告げたことば。イスラエルの歌の歌い手。」とダビデのことが紹介された後、先に記されるのは神の言葉であることが2節から3節前半で述べられています。「主の霊は私を通して語り、そのことばは私の舌の上にある。イスラエルの神は仰せられた。イスラエルの岩は私に語られた。」と。そうしてその神の言葉が3節後半～4節に記されます。『義をもって人を治める者、神を恐れて治める者。その者は、太陽が昇る朝の光、雲一つない朝の光のようだ。雨の後に、地の若草を照らす光のようだ。』

まず考えたいことは、これは誰について語った言葉かということです。5節に「まことに私の家は、このように神とともにある」とあるのを読むと、これはダビデのことではないかと私たちは考えます。しかし「義をもって人を治める者、神を恐れて治める者」とは、単にダビデのことだと言えるでしょうか。確かにある意味では彼は義をもって治めましたし、また神を恐れて治めたと言えるかもしれません。しかしサムエル記第二後半で見て来ましたように、彼には色々な欠けが見られたこともまた事実でした。特にバテ・シェバとの姦淫の罪をきっかけに様々な災いを刈り取る生活を強いられて来ました。そんな彼に何の留保もつけずに、この言葉が当てはまるでしょうか。一番良いと思われるのは、主なる神は晩年のダビデに、約束のメシヤに関するビジョンをもう一度はっきり示して下さったと見ることです。

そのメシヤはまず「義をもって人を治める者」です。人を治める者は本来、皆そのようであるべきですが、人間はなかなかそうはなれません。この世の支配者や政治家を考えてみても悪や不正がしばしば暴かれ、問題にされています。いや私たちも人のことだけ言うことはできないでしょう。自分が同じ立場にあったら完全に治めることができるのか。あのダビデも失敗しました。しかしやがて現れるメシヤは、まさに「義をもって

人を治める者」です。それと結びついているのが次の「神を恐れて治める者」です。神を恐れることがなければ人は高慢になります。自分が主権者となって、やりたい放題のことをします。しかし神を恐れる時、その人は神の御心を行おうとして、へりくだって治める者となる。そういうやがてのメシヤがもたらす祝福が4節に描かれています。

「太陽が昇る朝の光」。これは何と素晴らしい、またすがすがしいイメージの言葉でしょうか。この言葉が意味する一つのこと、このまことの王が来るまで、この世は夜の状態、やみの状態にあるということでしょう。それは罪の闇であり、まことの神を知らない無知の闇であり、また様々な苦しみや混乱の闇です。しかしこのメシヤが義をもって治める時、朝の光が注ぐような祝福が訪れる。朝少し早く起きて、朝日の光を浴びる時、誰でも何とも言えない気持ち良さを感じるものです。当りはまだ静かで、空気はひんやりしている中、確実に太陽光線の暖かみを感じます。その光に接すると心に喜びがわき起こります。命が新しく注がれる感じがします。植物は光を受けて反応し始めます。ましてや雲一つない朝の光はどんなにすがすがしい気持ちと喜びを私たちに与えてくれるでしょうか！4節後半は訳が色々です。ある注解者は「雨の後に照らす光」と言うよりも、太陽の光とセットで命を与える「雨の恵み」が語られているとします。いずれにしろこれらのイメージを通して、人にいのちを与え、その心に大きな光と喜びをもたらすメシヤが来る！という幻を神はもう一度、晩年のダビデの胸に示して下さったのです。

この神の啓示を受けてダビデは5節でこのように語ります。「まことに私の家は、このように神とともにある。神が永遠の契約を私と立てられたからだ。」ここでダビデが考えていることは何でしょうか。それは神が自分との間に立ててくださった契約すなわち7章で見たダビデ契約です。神はダビデの身から出る一人の世継ぎの子をダビデの後に起こし、彼の王国を確立させる。そうしてあなたの王座はとこしえまでも堅く立つと言われました。ダビデは3～4節の主の言葉を受けて、このダビデ契約を思い起こしているのです。そして5節後半でこう告白します。「それは、すべてのことにおいて備えられ、また守られる。神は、私の救いと願いを、すべて育んでくださるではないか。」と。

このメシヤの到来は、より頼む者には救いとなる一方、よこしまな者にとってはさばきとなるというのが6～7節です。その者を主はやがての日にいばらを焼いて捨てるよ

うに投げ捨てられる。さばきが行われる日までは生かされても、やがての日には取り分けられて、火で焼き尽くされる。そういう日が来るのです。

さて8節以降はダビデの勇士たちの名簿です。ダビデはやがて来るまことの王を指し示す王としての歩みを導かれましたが、その彼の王国を主がたくさんの勇士たちを備えて祝福して下さったことがまとめられています。まず8～12節にタハクモニ人ヨシエブ・バシエベテ、またアホアハ人ドドの子エルアザル、そしてアラル人アゲの子シャンマの三勇士のことが述べられています。一人目のヨシエブ・バシエベテは一度に800人を殺したこと、二人目のエルアザルは剣が手にくつつくまでペリシテ人と戦ったこと、三人目のシャンマはで兵士たちがみな逃げた時、畑の真ん中に踏みとどまって戦ったことが述べられています。いずれも大変な勇士です。しかし注目すべきは、10節と12節に繰り返して「主は大勝利をもたらされた」と書かれていることです。すなわち彼らの活躍の背後にあって事を導き、ダビデ王国を祝して下さったのは主なる神であった。

続く13～17節には30人のかしらの内の3人の働きが記されています。この3人はダビデが要害にいた時、ふと「だれかが私に、ベツレヘムの門にある井戸の水を飲ませてくれたらよいのだが」と言った言葉を聞いて、相手の陣営を突き破って水を汲み、ダビデのところへ持ち帰って来ます。ダビデとしてはまさかそんなことになるとは露ほども思わず、つい生まれ故郷ベツレヘムを思い、ある種のホームシックにかかってこの言葉を発してしまったのでしょう。しかしこの3人はいのちをかけて、その水を汲んで持ち帰って来ました。何という忠誠心でしょうか。しかし兵士が兵士ならダビデもダビデです。彼はこの水を自分は飲むことができないと言って、主の前に全部注いでしまいます。何ともったいないことか！せっかく汲んで来てくれたものを無にする行為ではないか！と私たちは思います。しかし事實は、ダビデはこのような王だったから、その部下たちは献身的に彼に仕えて来たのもあったのでしょう。ダビデは兵士たちが払ったこのような犠牲は主にこそささげられるにふさわしいものであって、自分がこの立場を利用して受け取るべきではないと考えました。彼は自分はこのような待遇を受けるには値しないと認める謙虚な王でした。彼はこうして兵士たちがしたことを高く評価し、称賛したのもあったのでしょう。

18～23節にはさらなる勇士としてアビシャイとベナヤのことが記されています。アビシャイは槍をふるって300人を殺しました。またベナヤはモアブの二人の英雄を打ち殺

したり、雪の日にほら穴に降りて行って獅子と戦ったこと、また堂々としたエジプト人と呼ばれる相手をも倒した豪傑でした。このような勇者たちによってダビデは支えられたのです。

最後 24 節以降には、30 人の中の他の人々の名がリストされています。最後の 39 節に「合計 37 人」とありますから、これは正確な数と言うよりは「あの 30 人」と呼ばれるグループ名のようなものだったのでしょう。ここはカタカナの名前の羅列で、読んでも何の意味があるかと思われるようなリストですが、私たちが目を留めずにいられない名前が一つあります。それは最後の「ヒツタイト人ウリヤ」です。彼はダビデの姦淫の相手バテ・シェバの夫です。ダビデはその罪の発覚を恐れて、夫ウリヤを激戦の真正面に出させて死亡させました。その彼の名前がリストの最後に出て来て私たちはギョッとします。これは本来、伏せておきたい記録でもあったのではないのでしょうか。もちろん私たちはこの一つのことをもって、ダビデをあまり見下げないようにすべきです。I 列王記 15 章 5 節：「それは、ダビデが主の目にかなうことを行い、ヒツタイト人ウリヤのこのほかは、一生の間、主が命じられたすべてのことからそれなかったからである。」この一つのことの他には一切逸れなかったと言われるほど、ダビデは主に従って歩んだ素晴らしい人でした。しかしそんな彼にもこのようなキズがあった。つまりダビデはやがて来られるメシヤを指し示す器ではありましたが、彼自身がメシヤなのではない。私たちはこのリストを最後まで見ることを通して、ダビデは素晴らしかったが、彼ではない、彼に勝るまことの王こそを待ち望むように！と導かれるのではないのでしょうか。

そして今日の私たちが思うことは、その約束のメシヤはすでに私たちのところに来られたということです。その方によって「太陽が昇る朝の光」の祝福はすでに始まっている。ルカの福音書 1 章 76～79 節：「幼子よ、あなたこそいと高き方の預言者と呼ばれる。主の御前を先立って行き、その道を備え、罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与えるからである。これは私たちの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、曙の光が、いと高き所から私たちに訪れ、暗闇と死の陰に住んでいた者たちを照らし、私たちの足を平和の道に導く。」 マタイの福音書 4 章 16 節：「闇の中に住んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が昇る。」 ヨハネの福音書 8 章 12 節：「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」 エペソ人への手紙 5 章 8 節：「あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました。光の子どもとして歩みなさい。」 私たち

はこのイエス・キリストを信じて、今や太陽が昇る朝の光に生かされている自分であることを知っています。

しかし同時に、それはまだ最終状態には達していないことも私たちは知っています。自分の生活を振り返って、そこに光はあるけれども、雲一つない朝の光だけが満ちていると言えるでしょうか。そこまでは言えないですね。つまりこの約束が真に実現する日は、なお将来にあるのです。そんな私たちが今日の箇所を通して改めて心に留めるべきは、この太陽が昇る朝の光が一杯に満ち溢れる約束の日は必ず来るということです。この「太陽が上る」という部分は、英語の聖書では「サンライズ」と訳されています。私が思い起こすのは、まさに「サンライズ」という名の夜行列車に乗った時のことです。朝5時頃、目が覚めて列車のカーテンを開けたらビックリ。東京に向かう列車は広大な駿河湾を見下ろす崖の上を走っていて、ちょうど水平線から美しい日の出が始まった頃でした。私はガバッと起き上がり、ひたすらその光景にくぎ付け。その状態は2~30分続いたでしょうか。私はその光景を眺めながら、ただただ感嘆の声を漏らし続けました。まさに雲一つない朝の光の素晴らしさ、その輝きに身も心も躍りあがって喜ぶような時でした。その祝福が永遠に続く日がやがてメシヤによって来るのです。今はまだこの理想から程遠い状態にある私たちかもしれませんが、目の前の現実を打ち破ってメシヤによる朝日の祝福が最終的に実現する日が来るのです。

主は晩年のダビデにこの素晴らしいビジョンをもう一度示し、この希望によって彼の心を奮い立たせてくださいました。果たして私たちは自分の人生の終わりの時が来たなら、どんな言葉を書くのでしょうか。地上の人生の終わりを前にして落胆の言葉を書くのでしょうか。あきらめの言葉を書くのでしょうか。つぶやきの言葉を残すのでしょうか。あるいは過去の栄光にしがみつこうような言葉を残すのでしょうか。このダビデの最後の言葉は驚くべき明るさと希望に満ちています。彼の人生を振り返れば色々なことがありましたが、彼はメシヤに関する主の約束を仰いで、いよいよ太陽が昇る朝の光の世界を喜び見つめています。神は同じように私たちに対しても、今どんな現実があろうとも、この神の約束に立って歩みを進めるようにと、今日の御言葉を通して招いてくださっているのではないのでしょうか。神は義と敬虔をもって治めるメシヤによって栄光の日を来らせて下さいます。その日に暗雲のかげりは一切見られず、太陽が昇る朝の光、雲一つない朝の光が私たちを覆います。その私たちの行く手にある栄光を望み見て、希望と喜びをいよいよ大きくしたいと思います。そしてダビデとともに次のように告白して、かの日に

向かう歩みを引き続き進めて行きたいのです。「それは、すべてのことにおいて備えられ、また守られる。神は、私の救いと願いを、すべて育んでくださるではないか。」と。